

報告 4 : 松戸庸子 (南山大学)

中国リベラリズムの敗北ー「狼牙山五壮士」名誉毀損裁判をめぐるー

習政権下では言論・報道への締付けが日増しに強化されている。提訴から 2 年余りの昨年 8 月 15 日に結審した「狼牙山五壮士」名誉棄損訴訟は、リベラル派知識人の敗北に終わった。抗日戦争下で生まれた八路軍兵士の行跡の神話化の正当性が司法の権威によっても追認されたのである。これで勢い付いた左派・軍部は「国家英雄名誉保護法」の制定を模索している。本報告では、この裁判の背景、前史、裁判闘争で使われた論理や論拠などの分析を通じて、この訴訟の意義を考察し、残された課題や今後の研究視角を剔出したい。

「狼牙山五壮士」は中国では人口に膾炙した軍人英雄譚である。小学校 5 年生の国語の教科書、映画や TV ドラマを通じて皆が知っていると言っても過言ではない。その“英雄性”に疑義を挿んだ 2013 年夏の或るツイートが「治安管理处罰法」を適用されブロガーは行政拘留 7 日とパソコン没収の行政処罰を受けた。これを不当と考え“史実”に基づく論駁をメディアで展開したのが『炎黄春秋』編集主幹（当時）の洪振快であった。これには左派と軍部からの組織的な反撃があり、五壮士の子孫も絡む複数の名誉棄損訴訟へと発展したが、洪氏の敗訴で結審した。

一連の筆禍事件は『南方週末』事件（2013 年正月）、「七不講」騒動（同年 4 月）に次いで発生したもので、時代が指向する政治的な趨勢のひとこまとなった。ネット空間で展開されたリベラル派知識人 vs. 左派・軍部の攻防の分析からは、現代中国における“歴史学の後退”や、勝訴側が“歴史虚無主義”というタームで理論武装を強化したことがわかった。さらに、この訴訟からは左派・軍部 vs. “世俗化”のせめぎ合いという新たな対立軸も見えてくる。“世俗化”という茫漠とした社会構造変動は、いずれの側にとっても制御困難で厄介な現象である。